

藩鑑

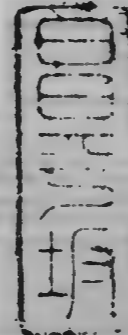
伊達

百二十四



| | |
|--------------|-------------------|
| 庫文閣内 | |
| 五九 一 架 | 三四 八 二 號 |
| 二 八 冊 | 和 書 |

| | |
|------|-----------|
| 内閣文庫 | |
| 番號 | 和 34682 |
| 冊數 | 278 (125) |
| 函號 | 159 1 |



藩鑑卷之二百十七目錄

大部三

松平陸奥守藤原政宗

藩鑑卷之二百十七



松平隆真守後永政宗

一文祿三年三月廿七日秀吉遊于和州芳
野山催歌會公及天下之諸將皆從之見
花娛意吟詩詠歌就中伊達政宗雖生邊
鄙賤地精和歌最邁人因促殿下之興

創業記

前田

一文禄之年二月廿六日大岡右将の花は
賢らるへまこと大坂より出させ給
ふ同廿九日清歌會各め首の和歌を
録す

花のねい

侍従政宗

たるくハあうぬらむ但せう
ち〜さてもとらるよ〜もさ

風不散花

遠く〜く〜花の梢も白く
き〜た〜まぬ風や吹らん

濠上花

茶師山濠津流まら花ちま
ぬせ〜に〜る浪そまら

神前花

い〜雅深さ〜の根〜に
ら〜神垣花を極けん

花の祝

君うしよめ 昔那らの山の松の葉の
しんせいにむけ 色やそはば

寛永板大岡元

一 政宗ハ若年よりこの歳に道長
風を五月にむけ 慰められ
や 政宗は外舅義光の在城の山
形より年山として名所ありとて年

よ阿古屋の松の蒼積あり 政宗十
又歳の秋義光のとくによみく
贈らる

恋しきも秋を待つとるふ年山
あらむにねるま隠さけ月

貞相永庵筆元

関の雪とらふ 懸りて
さすとも 惟る細んき坂の

世をけ戸垣しおももの白雪

後水尾法皇らの歌をと敵感あり

く集外歌仙よふさ終ひしを

ありし 續明良洪範

一 伊達の政家いさうなるを智勇あり

人ありまをくよふさ馬の道よ名

ありし世の中いさうなるをいさう

軍陣ふ日と道くさうなるをいさう

世道ふ志ありしともいさうなるをいさう

天下泰平に治つさく後一首の待を

紙す

馬上少年盛太平白髪多残軀天

所賜不樂復如何

世の人をいさうなるをいさうなるをいさう

つらしとさく 老漢一言記

一 又待あり

春雪

藤原政宗

餘寒無去發花遲春雪夜來欲積時
信手猶斟三盞酒醉中獨樂有誰知

欲征南蠻作

邪法迷邦唱不終欲征蠻國未成功
圖南鵬翼何時奮久持扶搖萬里風

歷朝詩纂後編

一 政宗未澤に在城のらる城下に殺

若坊といふ山伏ありと大軍態跡相見
山よかくまゝあると荒行者少くして修験道
ハ役の優波女寒箕向山崎地獄入
うゝ〜 飛樹菩薩より胎藏界令別
界の支那修行の秘法相承せし知
とも残らん片月成佛の眼を用き
行ひすまませし容傍より政宗奪
符のくさるるに彼の山伏う庵ふまき

終つて庭より度々の神有経所
の見入をまたうとけふ作られたる般
若坊ハ境中冷懸と着し畏る彼
庭ふ枝より畏るるみ葉の枝一本阿
つと改宗下らまし終つて般若坊ら
う惜む氣多しある畏りゆと程歌
と續くもなる

平一とありみ葉の枝一本阿

い世経おらんらみ庭の松
改宗下らまし返歌よ

公経の摩何のりする般若坊
一切公役を役をりけり

と宣ひし般若坊自他の田地十
母夫のふふと知行しうそたまりけり

奥羽永度軍記

一 或とて改宗尊徳に出る般若坊の

庵に入給ひく能多改なりとて名
號と稱りる般若坊なり一戴と佛壇
みかゝるとして取違へかり申すと
て

梶原と般若坊より二家のなり

それハ言名られたる名号

改宗とりあへり

般若坊武道と志くは歌道あり

あふ梶原ふととりやうせん

又改宗安積表の常陣の道の人と
つゝは能多一人ありと近おの者と
も殿の仕通りそ度改服よきと聲
と揃ふは改か一もさへは杖ます
かり二王とよむとく大音とあり
ね歌とよむ

外々そよ入ましくあはれはるるあり

君ハ改宗りてハ正都

改宗りんたまひくこほ度所のみと
し〜憶もる氣色もあ〜和歌とよ
み〜らそ曲奴あこ〜ま澤よつこ
ま〜り技指と繩り〜に和歌を
るる度所あ〜り〜或〜信まめ下
つ〜給ひ〜まれら〜る〜に跡
老れ葉子と心都よ繩りる是と取

落

ち〜れ世つみ嘗やんおのり光り〜あ
信まめ〜こ〜の落と〜ら〜ん
し〜和歌と〜そ〜よ〜み〜け〜の改宗聞〜ま
ひ〜ら〜〜度所あ〜和歌〜改宗
う〜ま〜入〜信まめ〜何者〜落す〜
ち〜ら〜〜たま〜心都〜ら〜ら〜く
す

清少輔入るを頼むハ多ク

志のみの里ハよ

と云々〜

同上

一 文禄元年二月氏卿率

男守致意に

作せと

沙汰す

の

其

教

の家

大

に

誕生

遠

彼を長けしめたりし事ハ彼男と
取て伊達家とハつてせん汝らす
へかゝく遠隔にうらみす
やうふ中国よ苗の宗徒の家人等と
ししゝく下のゆせよかからう
んるゝいその彼ふ絶居すゝ
めて都よ登り 臣民の衆よらりか
る所よ政宗家子孫の事の中を獲

拂ひてさう死せしめしめて落中
のみに落ぬし又政宗の大岡と
なすゝしする後やうしにさる
江戸中初之殿の伏んばは鉾の外
標とさう大岡の標のやうと
し 政宗とみしとたりし者の志
うらうらうらとさうハ秀次とみせ
しなるゝし事よらの標たし

奴らより取為るなりけりといとてつゝあふ行
とゆふことして帰す
後幹譜
武使大成元

一伊達上野年經の後志つゝと者
に後つゝと志つゝと中す老人は
中せつゝは度政宗より終りつゝこれ
事いひつゝよ

徳川殿の由ちかつゝあることつゝあ
大岡政宗と伊豫國よりつゝとんと

擬せつゝる政宗大いぬ致すとい

徳川殿よつゝと志つゝせんといつゝ伊
達上野年經いひふことつゝと家の子
一人といつゝと依見れ由館よあつす
徳川殿二人の使を由宗よめつゝる朝
中つゝとつゝとあり由火燦よより
つゝとつゝとつゝと二人つゝと旨と志つゝと
由氣といつゝとつゝとつゝと世給ひて朝と

くまのこゝろかゝるにきつさるゝ
賜りてと作りてやうに佐藤と
すゝむ二人佐藤とまかりまんと
せしにたゞそゝにて給ふれと
しかは佐藤とまかりまんと
佐藤とまかりまんと
よゝまゝと佐藤の人と
徳川殿二人の給ふをぬらされ

給ふれとまかりの佐藤と給ふり佐藤
佐藤とまかりと佐藤ひに
給ふとまかりと佐藤ひに
人となりて佐藤のかつとに
後佐藤とすゝむに
二人またまかりとまかりに
佐藤とまかりとまかりと二人は
使政宗いふ行とに存す

返事うけ給てるへーとやせーと
と志をぬよりたりにせ給ひ大さうな
るに聲にこそやあまのさうま人が
も日らうハ世の人をいさふ忠ともた
もつて荒涼の事とていさふと
らふらふまひ多しとてかゝるさうのよ
きうらうらふのつねのさうせいなるか
つとてあまのさうま人とて病の者とい

いとんにいふよまのきとてあまの作豫
にさうらうとて魚の餌とていさふとて
もつて赤都の月とていさふとて大の食ふ
るいとんとてたのうけ二條の月とてた
のひさうとてあまのさうま人とてあまの
事とていさふとてあまのさうま人とて
は二人とていさふとてあまのさうま人と
あまのさうま人とてあまのさうま人と

家の子席等たる討まを留てぬ
やとて大いなる事たる落申の事後
教をさ給く事夥しけり大なる
ゆの事しめたる大周事けりとも
よとして政宗の左の家人等し
めすし事しり信使の由使と給たる
政宗の家の子席等とてしめて雜人
とてにふるまひて或は弓とてしり

矢の事とては矢槍よ火繩とてし
み躰薙刀と杖とて大庭にみち
たり政宗は使とてしりたる
あゝめて刀とて常世のつら
押しやとてわが門ひつらせぬ
しりし事作ぬりて後政宗の
とぬりし事しりし事しりし
會儀しりし事しりし事しり

洛の事一任後すくしに卒ぬ今ふま
て一任の返事よまのさむい
又いある奇怪もや仕らんとす
知もよとひとくは使と返ぬ

徳川殿も洛も一任發動とさ
し大坂に集り給ひ故よ政宗
う家人等と務せしん事何ほ
れ事いふとさうさ東國の家

人等累代の主人とさるる
さかく浪遊とさるる
すともいなる作はさるる
さかま一朝鮮の事いさ
らす本朝のうらまたらまらに
草ならし事いさ
大平れまのゆ事らるる
ういさるる

彼累代の御領とていふもいふも
よののよのの志とていふもいふも
も實宥ははらはるやるもいふも
とていふもいふもいふもいふも
もよよもいふもいふもいふも
祀よは事いふもいふもいふも
事いふもいふもいふもいふも
けいふもいふもいふもいふも

二 渡幹譜

一 大岡秋津代大ある後とていふも
いふも後人といふもいふも
もいふもいふもいふもいふも
存せといふもいふもいふも
とていふもいふもいふもいふも
城の御いふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふも

とていふ事ありしを大勢は門ふハ多
に是らりゆよ——改宗極右のやうす
とていふ事ありし速疾病氣分にして佐登城と
よしきとして彼後川は多しとらり
密に右様と佐登城の玄園
似たる所よりある事と改宗極右通
りし事極右とていふ事ありしと
りし事とていふ事ありしとていふ事ありしと

よとていふ事ありしとていふ事ありしと
に佐登城と改宗極右とていふ事ありしと
身と縮め退きし事ありしとていふ事ありしと
佐登城ハ通——ある事ありしとていふ事ありしと
是あるにいつき大岡極右は事ハ佐登
城とていふ事ありしと改宗極右といふ事ありしと
身と縮め退きし事ありしとていふ事ありしと
佐登城ハ通——ある事ありしとていふ事ありしと

かへらんといふ——いふ家と改宗候も
しとていふ——いふくハ彼様と申しりて
いふ——いふ——いふとて改宗候大岡候右様
もいふとて改宗候もいふとて改宗候又いふ
まよりりたるよ——いふ——いふひるい
いふ——

武門諸親拾遺

一 ちる人のお終よ秀吉と船遊に出候
ふよ改宗候をいふとて改宗候

けるに澤山といふとて改宗候のいふとて
いふ——いふに馬といふとて改宗候
いふ——いふと目ふかり候吉の方へ
行りるに秀吉と船といふと改宗候といふ
たといふ改宗候といふとて改宗候といふ
候吉へいふとて改宗候といふとて改宗候
いふとて改宗候といふとて改宗候といふ
いふとて改宗候といふとて改宗候といふ
いふとて改宗候といふとて改宗候といふ

と宣ふは島今れたるハ政宗よしてありつ
るう武者ふり見ん事あるはまゝめく
草野くるとことありして鑑政の入り
る折と給りりける政宗頂戴して
折と引傾け我志あの荒とひら
け修政とらう——入包みして返すこ
我門のこのめと望よせまへ上様よりお
願うたらうそ汝等も亦く存——頂

戴せよとて残さず死りたり——志
深と事なりとらう——
公頼お終

一 慶長え年一 大岡松小幡山と佐藤んあ
うまは城の成るうまひよ——作也
大名元佐馬ありは少お元まて組く
ともは極月晦日と切ふ後徒成る
うまひよ——にして佐普信急こ中えん
ゆはる清鳴へ日く佐出さうせうまひ

佐々木あつねは或とて佐所掾と佐持
あつねは緒大佐元へ下さしめ改宗所
場へ成らせしとて改宗ハ大お教考
めしゆるる大なるう望にゆるしす
言あつねの仲と佐とて
よと大いなるハあつねとて
ハ緒人よすことと佐とて
ゆと何事とも佐元にて改宗ハ遠國人

めて一五年は佐をこめく形のこく
佐元よとて一真加のなめて佐取
少佐はあり

伊達成實記

一 大同薨——給ひてのち慶長六年は
秋中初ま景勝追討の事起る改宗そ
の事今あつね
徳川殿よきことたりて中国よ弛帰り
軍勢を信じてまろ白石の城を改

一 松山 梁川城を攻んとはかかるといふ
 徳川殿の使使まりて石田等退治の
 ためまう上方に登りぬへー 改宗
 在玉は軍をそろめすみかへるに徳川澤
 に引返ーかきぬては下衆をーむは
 と六軍出下へーいんと作下も。 後幹藩
 一 その後改宗は羽の最上は加勢ーと
 景勝の勢をうらやめる関白の一致終

一 諸公一時の平均ー天下すとて
 にろと袋をーやとつてむいふとも
 改宗やもすー六軍と出ーと景
 勝の地を借ー取らんとすむとて
 明も年々其まにふりてやまは 同上
 一 門府と余津へ出するありとて
 出さしーらら羽は景勝も 後號松平
 隆英守
 改宗大坂西へ系向ーとて入られ

けらハ糸——めさうき——如く——系る領地
ハ倉津と相まひひ——進た景勝際を
うかひて領地へ攻入る——いもさかり
か——ハ暇終るにはさうくハ決
せんく弛りり——防戦の下志とも仕り
うきと辨せしめる是ハ政宗領地を
守るに事よせし——地をへりらと欲地
と伐取らしたるためい——

門府と関ら——中——さうく——取ぬあまハ
我等よりせん——に領地へ下向せしる
へ——さうき——景勝ハさうか
の大款あらはひ——いよと手出——か
らけき用あり——と作りぬハ政宗承ハ
く——作と骨——き——に——い——なれ
もかやうに打ち——款地を切取ら
す——い——たをよあり——

とらりけるを

門府の地をひりて今ハ地邊の
細中分明ある領地をさるふかこ
ついで我より先は地より景勝
う領門へ人数を出すことためさん
えたらうと物さとも貴族にかさ
以今度裁切ある案にハまゝの母
費とて送すこと約諾あり下意と

得て軍功とたてらるゝと宣ひけ
まこと改宗まゝにさしつけハ倉津陣
の由恩賞ハ景勝亡ひて後代御裁許を
るへ〜と〜と〜に景勝隊をさ
らひに〜の實地山を合て宣〜
歸ふたと〜ある〜一日も〜
り〜欲の虚実を〜かり景勝の領地
とけつ〜取〜茶の代ま〜度

とつておとすべし

門府公らよ〜興らら〜せたまひて
之より〜越ふるをいかに下をせら
る〜と〜やうに正服と経よりけ
らハ政宗恨ひて宵十日に大坂
より〜へ下向せ〜

関東軍記大成
東遷其業

一 伊達方系方又政宗舍津征伐の事

急をいふ由り歸つて備ふよると攻入る
とす〜作とす〜大坂とす〜三夜
と日に継いで池のり白川すり白石を
取り〜管款の中らぬ道寒〜りぬ
岩陰よととり〜岩城相馬よ〜る
掛りて國よ作らんとするに相馬も
又豊代の仇あり死る政宗僅み千
餘〜かり引具〜と岩州と〜

岩城おるれ境より至るまじり相言ふも
とに使者をとまはせし度

徳川殿上杉と征伐し終ふより
政宗搦手お向ふことよしの作と水
くりぬ降既よ寒るし海に漸く
け地よ地なきぬあまりにふあそ道
とあしむへ疲るる願うハ城下に旅
彼と終りりゆはちやるもの足付めく



明日降り入らんて夜するところを
つと相言長門も義胤を聞あつらん
運の盡る事よかきぬに伊
年六相する年ららの款をりましや
味方と討んとく一方はたね水りた
るしやらし今おハ相討し案門
知ぬぬふも残らぬ討面し年らら
の仇を報ひ又今年度の賞にも預らるや

とて故て民家も志うつらひて連入す
人々も集めくむむの解き一たさ
けりて爰に水谷之市を誘還す末彦よ
つし進みぬ末彦の吳ん思ひてつと
も既よ命穢の席に列りてぬハ亦存
と發す一とにありに折窮を懐
く。しとハ獵作も是と殺すすしと
そ中りて政宗をくけ大抵年一末の恨

と捨てて君と殺しぬしとた
かりとくやと殺すしハ勇者の
意よりしに長きとる筆の波瀾あ
はれ又彼、國境約等にむらん、行程
僅よらまげり日らまの時のさか
に政宗國よ入んとなむと日夕
るしとにらむしとまふ僕の勢
みしとる事一深き意をうしと

唯けなむハよきとに教へて一國よ返し
重し哉よ勝まん日勝級と天運よ但
せしるるしむおとる一けむハ二度の
人くけ穢よ目一兵糧純葉陰魚ふ
るやまうしつみま重舞と禁ておとす
義流う士とも改宗解り志つまりかへり
たろ解こそむのこむ一らさ成れ
おとす後馬二足とり教へ一人をさり

散く取の外に路を馬の改宗ゆ童つ
人よ智とりのせ自と少袖とよようち
掛方のまらかとも引控ておとせら相
馬との市人やらとらさきおととせ仍
向へハお音言くハ改宗うト人お糧
藉ゆらんハ能陰めて給りりゆととて
あこゆぬ入るけのむおととて三も
やすすこめ時をかりにありて義流

其のことに使しつゝ一礼——さして志つめ
て馬を牛として仍ひさかふ人と背そく
窺ひしむに彼等の懐約を其れあま
くに伊達家其軍兵雲々の如く充
満ししと違ふぬか——と聞ふの事——終
て相する既よ上杉よんどと合せたはハ
ちふ——に極る政宗新へ——さき——
ハ相馬ハ年ららう政宗の款あり石田

上杉よ其——たらう一定を——んめハ政
宗彼ら為ふ討らへ——其らに君の作
と有りて馳しるよ——と夢みて深き
恨を志す新恩と獲——のひを彼の
逆謀より——するの後よのひにや——又
田島代らう其の象永く斬ん奉る使
其らありありと面く款を——さきし
かそ本願を相馬よたらまうりけらと

一 慶長六年 改宗最上義光に加勢
のしとて改宗ある軍ハ旗の紋ハ院監
一面と書たり我ハ院監あり欲い
けといふ事なりと宣ふ 東國太平記

一 蒲生源左馬のハ倍長されともそそ氣
雄豪なる者あれハ時々改宗と牴
牾のふるまい有しといふ武とて改

宗源左馬の所領須賀川の宿へ入
らうといひとく宿の跡をみて
矢方せきせけとて火と殺しむとて
上下弛遠く改宗よれ者とも長柄の
旗の鞘と宿の屋柱をひきかき
くろくく馬の前後と教へて一
部とて後懐中よりと各々か替れ
旗の鞘と取やして静まかりて通

ア〜とあり 御は始の布と周章
て池の朝とまに〜とつさんとせハ長
兵様たごり〜とつ支へ多う〜ハ
まハ屋の棟め〜とつす事〜ハ福あり
又後ハ朝とよと〜とせハ是又混
雜〜と見え〜から〜とよ是等ハ
器ま〜と未然の用意ありとハ是くの武
伎か〜と事〜とありと 会津に家会考附録

藩鑑卷之二百十八目錄

大部四

松平陸奥守藤原政宗